

『同志社大学内の遺跡とその周辺を歩く』

担当:3丁目 井守徳弘

●予定コース

近鉄高の原駅(9:01)―近鉄三山木駅(9:15)―奈良交通バス三山木駅(9:29)
―バス停普賢寺(9:36)―近衛基通公御廟―観音寺(十一面観音拝観400円)
―日本最初外国蚕飼育旧跡―多々羅―同志社大学キャンパス内筒城宮伝承地
―同歴史資料館(無料)―同下司古墳群―同志社大学内食堂(昼食)―
田辺天神山遺跡―奈良交通バス同志社山手中央―バス停三山木駅―
寿宝院(千手観音拝観300円)―飯岡横穴―咋岡神社―トヅカ古墳―
薬師山古墳―ゴロゴロ山古墳―穴山梅雪の墓―飯岡車塚古墳―近鉄三山木駅
―近鉄高の原駅 (約8km・午後5時ごろ解散予定)

●近衛基通(もとみち)公御廟

平安末期から鎌倉初期の公卿。摂政・関白藤原基実(もとざね)の長男。近衛殿、普賢寺殿と号し普賢寺関白ともいわれた。近衛基通は、観音寺大檀越(だいたんおつ)として伽藍の復興に貢献した。

治承3年(1179)摂政・氏長者の叔父藤原基房が清盛のクーデタによって解官されると、内大臣・関白となり、翌年には安徳天皇の摂政となる。時に21歳。

平安末期の治承5年(1181年)閏2月に清盛が薨去して平家が急速に衰退し正室は清盛の六女。寿永2年(1183)平家の都落ちに同行するが引き返し、後白河法皇の意向によって摂政となる。同年木曾義仲に追われるが翌年復帰。

文治2年(1186)源頼朝の意を受けた兼実が摂政・氏長者を代わられ、摂関家は近衛家と九条家に分かれる。その後建久7年(1196)に兼実が失脚すると、源通親の後押しによって再び関白となる。

建仁2年(1202)通親の死後、後鳥羽上皇の意向により摂政を辞し政界から退き、承元2年(1208)年出家。行理と号して普賢寺に移り住み、74歳でこの地で亡くなる。屋敷跡が墓所として残されている。

●大御堂観音寺

大御堂観音寺は、天武天皇(672～686)勅願により義淵(ぎえん)僧正が創建し僧正自ら薬師・釈迦如来を彫刻し釈迦堂に安置した御願の寺で、最初は観心山親山寺(筒城寺)と称した。

その後聖武天皇の勅願により東大寺初代別当の良弁僧正が天平16年(744)に伽藍を増築して息長山(そくちょうざん)普賢教法寺(普賢教王寺)と号し、十一面観音立像を大御堂に、行基作の普賢菩薩像を小御堂に安置し七堂伽藍の大寺となり、南都興福寺の別院(筒木之大寺)となった。

宝亀9年(778)には東大寺修二会(お水取り)の創始者である実忠も五重塔を建立している。

その後の延暦13年(794)の平安遷都された年の火災など数回の火災で再興されたが室町時代の永享9年(1437)11月の火事で殆ど失われ、二年後に大御堂・小御堂のみを再建した。しかし安土桃山時代の永禄8年(1565)年の兵火では大御堂のみ再建された。

地名の普賢寺は、寺名の普賢教法寺と小御堂の普賢菩薩像から「普賢寺」という地名になったと考えられる。

『普賢寺由緒書』によると、小御堂にあった普賢菩薩は「治暦(じりゃく)4年(1068)火災被り、その後將軍足利義満の時、京都鹿苑院(ろくおんいん、金閣寺)建立、この像霊仏としこの院に移す」と記されている。(昭和25年の金閣寺放火事件の時に焼けた仏像明細には既に普賢菩薩はなかった。)

現在の寺名である息長山観音寺は、本堂(昭和28年3月再建)と庫裡・鐘楼と鎮守の地祇(ちぎ)神社だけとなり、塔跡などに数個の礎石を残すのみとなった。

本堂に安置されている十一面観音立像(国宝)は、天平時代の作で等身大の木心乾漆造金箔押の創建当初の尊像である。拝観します。(400円)

御本尊以外にも、室町時代の十二神将像、地蔵半跏像などもおられます。



「興福寺別院普賢教寺四至内之図」:普賢寺所蔵

この絵図には室町時代の正長元年戊申(1428)・・・改正之の記載があるが、同志社大学歴史資料館館報などで疑問を呈しています。

椿井政隆が明和7年(1770)～天保8年(1837)により創作された古文書を装ういわば偽文書ではないかとの説もあります。

境内には東大寺二月堂「お水取り」の籠松明に使う「竹送り」は、2月11日に根付きで掘り起こされた数本の真竹を大御堂観音寺まで運び「奉納二月堂・・・」と墨書されて二月堂まで運ばれる行事があります。

鎮守の地祇神社は、もと地主神社と言われ寺の東北の山手にあった。祭神は、御霊天皇と称し継体天皇を祀り、また山王権現と称し神功皇后を祀っていた。

神功皇后(息長足比売命)は、息長氏の出であり、近くの興戸に伝わる三韓征伐時の「鉾立之松」等の神功皇后伝説と関係がある。

息長山普賢寺の山号が「息長山」であり、息長氏がこの普賢寺郷を根拠地にしてきたと考えられます。

中世に普賢寺領の荘官を務めていた下司家は、息長姓(下司因幡守息長実秋)を名乗っていた。

地元の古文書『下司古墳之図』には「下司館・息長山・息長家居住之地・息長家之墳也」とあり「息長一族」が住んでいたところとされている。

下司古墳群は同志社京田辺キャンパス内にあります。

●日本最初外国蚕飼育旧跡

この碑は「昭和3年(1928)春 京都三宅安兵衛依遺志建之」とあり、京都に住む篤志家により建立されたものである。多々羅には百済からの帰化人たちが豪族の奴理能美(ぬりのみ)を中心に住み、養蚕と絹生産を営んでいた。

『古事記』の仁徳天皇の条によると、仁徳天皇の皇后・磐之媛が、この地に住む奴理能美(渡来人)の邸宅を宮室として居住され、「一度は這う虫になり、一度は殻になり、一度は飛ぶ鳥になって、三色に変わる」という珍しい虫(蚕)を見たとの記述がある。この物語を根拠として、外国から蚕が持ち込まれ初めて飼われたのが、山代の筒木の地であり、それは古代から商業が栄えていた多々羅であると考えられている。山代の筒木は山城(山背)の綴喜(筒城)である。

●多々羅

「たたら」という地名は、西日本に多く見られ「多々羅」「多々良」が多いが「多田羅」「多田良」もあり、山や川の地名や名字などに見られる。

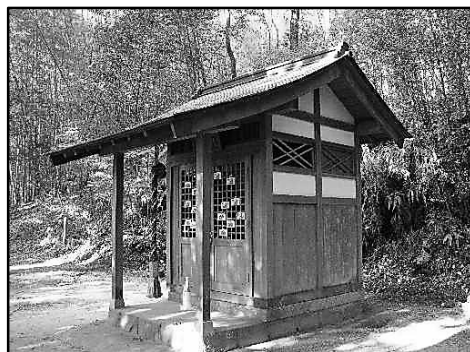
「たたら」は製鉄技術の「踏鞴(たたら)」で、足踏みで風を送る送風装置「鞴(ふいご)」の鍛冶金工を表す場合もある。

普賢寺の南東に位置する多々羅は、欽明天皇の時に百済国余璋王の王子である爾利久牟王(にりくむおう)が朝廷に金属製品を献上したので多々羅の姓を与え南山城の普賢寺谷(同志社キャンパス内)に住ませました。

『新撰姓氏録』山城国諸蕃に「多々良公。御間名(任那)国主・爾利久牟王より出づる也。欽明天皇の御世、投化して、金多々利に多々良公を賜ふ也」とあります。金姓である。多々利(田又利とも記す)はタタラの訛りです。

この付近は欽明天皇のとき、我国に来た百済人爾利久牟王(にりくむおう)の住居があった所と伝えられ、近くに小さな祠(ほこら)の新宮社があり、古くは多々羅田中山にありました。現在は天王(南西1.5km)にある朱智神社の境外末社となり、素盞鳴命を祭神としている。

小さな祠(ほこら)の新宮社



●筒城宮伝承地

現在、この地名が小字「都谷」であるところから筒城宮の伝承地とされている。

昭和35年(1960)、遷都1450年を記念して、組織された「筒城宮跡顕彰会」により建立されたものである。

当時の明治神宮宮司、甘露寺受長氏の筆になる「筒城宮址」石碑を建てた。あわせて当時の村田太平会長(1888～1976)の筒城宮を讃える歌碑も副碑として建っている。

この辺り(興戸・多々羅・普賢寺など)は、第26代継体天皇の筒城宮があったとされる場所である。

『日本書紀』によると、継体天皇は樟葉宮にて即位した後、511年10月に皇居を筒城宮に遷し、518年の弟国宮(おとくに、長岡京市)に移るまでの7年間この地で過ごしたという。2012年は、筒城宮がおかれてから1501年となります。

継体天皇は、応神天皇5世の孫で、近江国高嶋郷三尾野(滋賀県高島市)で誕生。幼少の頃に父が亡くなり、母の故郷である越前三国(福井県丸岡町高田高向)へ移り住む。しかし、当時の武烈天皇に後継者がなかったため、507年、武烈天皇の姉、手白髪皇女を皇后として、樟葉宮(枚方市樟葉)にて58歳で即位。5年後の511年10月、皇居を筒城宮に遷し、7年間この地で過ごした。その後、弟国宮(乙訓)へ移り、その後ようやく大和に入った。晩年、九州で磐井の乱(527年)があり平定に苦心したが、後継を安閑天皇に禅譲し、531年、その即位と同時に崩御した。

●同志社大学歴史資料館

この資料館は1996年2月にオープンした博物館相当施設です。収蔵品は、歴代の考古学担当教授であった故酒詰仲男(貝塚遺跡)および森浩一先生(古墳)と、現在の考古学担当の松藤和人教授(旧石器時代)を代表とする考古学資料室の全国をフィールドにした研究調査と、校地学術調査委員会による今出川・新町・京田辺の各キャンパスの発掘調査で収集された85万点にのぼる考古資料や民俗・民族資料などから構成されます。また、京田辺キャンパスには天神山遺跡・下司古墳群・都谷中世居館群などの遺跡が保存されており、教育・研究に活用されています。

○第1展示室(1階)

第1展示室(1階)では主に旧石器時代～古墳時代までの全国にわたる地域の資料を展示しています。

【旧石器】二上山北麓や北海道置戸・白滝遺跡など、石材原産地の石器。

【縄文】前期(今から6000年前)の貝塚遺跡として有名な福井県鳥浜遺跡の資料を中心に展示しています。

【弥生】大阪府の観音寺山遺跡・和歌山県の太田・黒田遺跡や田辺天神山遺跡などの資料を中心に展示しています。

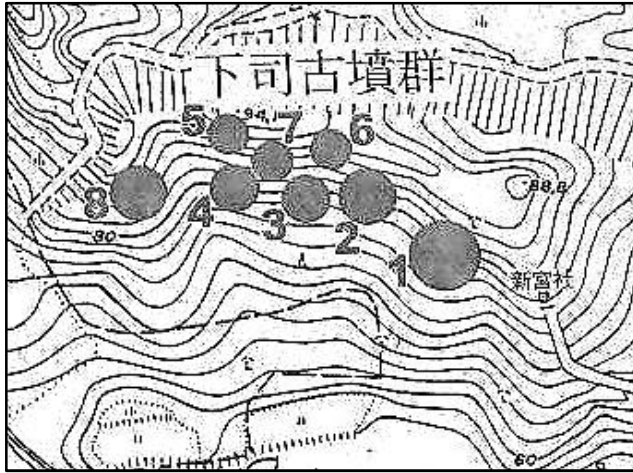
【古墳】京都府城陽市西山2号墳出土の三角縁獣帯四神四獣鏡や碧玉製石釧。京田辺校地内にある終末期の下司古墳群出土の土器や陶棺が展示されています。

○第2展示室(2階)

今出川キャンパスの発掘資料を中心とした「遺跡が語る京都の歴史」研究、窯業・漁業・製鉄・石製品加工などの生産遺跡の研究、そして考古資料などの「モノ」に遺された文字資料や、文書に描かれた「モノ」資料をキーワードにした考古・民俗・文献などの歴史系諸科学をつなぐ学際研究などの資料をテーマ別に展示しています。

●下司(げし)古墳群

京田辺市多々羅の同志社大学田辺校地内にあり、8基の古墳が現地保存されて、現在は考古学を学ぶ学生の石室実測図作成実習に使用されています。



○1号墳

径24mの最大の円墳で、横穴式石室は南山城最大級、全長10.55m、玄室長3.55m、幅2.05m、高さ2.1m、羨道長7m、幅1.8mの両袖式です。

石材はすべて生駒産出の斑れい岩で表面を平滑に加工していて、終末期らしさを感じます。玄室には7世紀前半の陶棺が置かれ、羨道には七世紀後半の木棺が追葬されました。

○2号墳

径14mの円墳で、横穴式石室は全長7.4m、玄室長2.75m、幅1.6m、高さ1.8m、羨道長4.65m、幅1.25mの両袖式です。石材はほとんど斑れい岩で表面を平滑に加工しています。玄室には木棺が置かれていました。

○3～8号墳

2号墳の隣にある3号墳は径15mの円墳で、石室は埋め戻されて石材が一部見えています。

4号墳は径15mの円墳で、石室は石材を抜き取られた跡が大きく窪んでいます。

5号墳は3.85m×1.1mの無袖式石室。

6号墳は2.45m×0.85mの無袖式石室だけが露出しています。

7号墳は全長4.1m、玄室2.3m×1.4mの両袖式です。

8号墳は藪の中に保存されています。

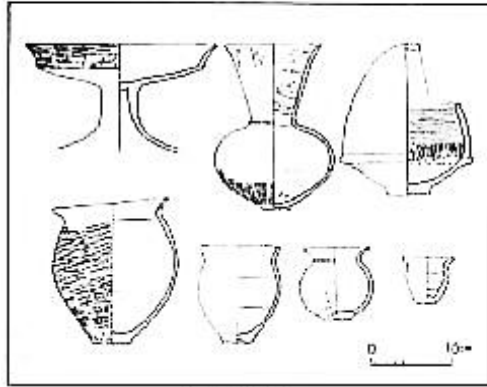
●田辺天神山遺跡

木津川流域を一望できる丘陵頂部に営まれた弥生時代後期(西暦2世紀頃)の集落跡。周囲の平野部からの比高差は約40mの地点に位置する。

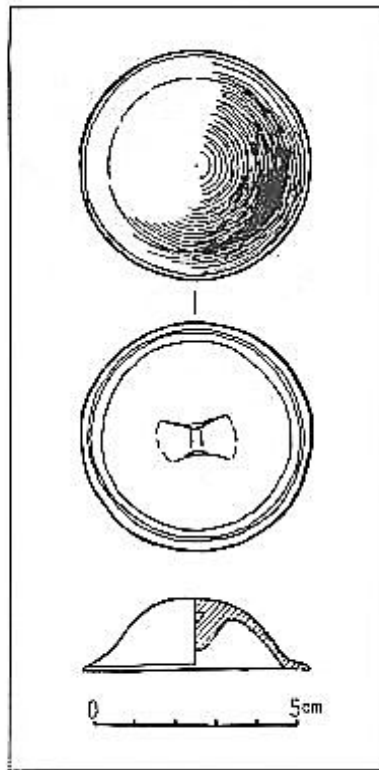
発掘調査では、約20棟の竪穴住居跡が、広場を取り囲むように検出された。住居跡は中央に炉をもち、4～8本の柱により建てられ、平面形は円形あるいは方形であった。遺構が形成された順序を検討すると、円形から方形へと変化したことがわかる。広場には、高床倉庫をはじめとした共同施設が作られていたと考えられる。

出土遺物には、土器をはじめ鋤先状鉄器・刀子・やりがんな・鉄鏃などの鉄器、石斧・石鏃などの石器が出土している。さらに、類例の少ない半球形青銅器が出しているが、この内面には紐などが通せる形状の装着部があり、何かにとりつけられて用いられたと考えられる。

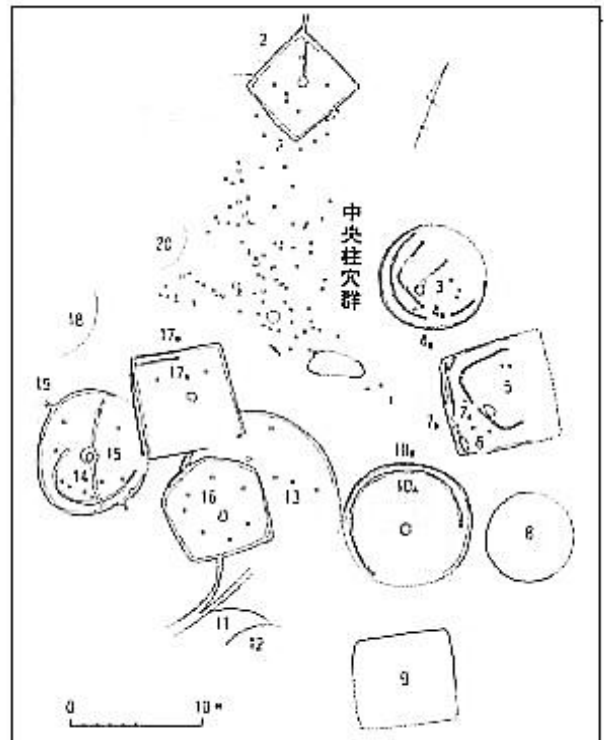
天神山遺跡のように平野から距離を置いた高所に位置する遺跡は、高地性集落と呼ばれ、逃げ城・砦のような機能も想定されている。中国の史書『三国志』の魏志倭人伝に、「倭国乱れ相攻伐すること歴年」と記された動乱を示す遺跡のひとつかもしれません。



●弥生土器



●山辺天神山遺跡出土青銅器



●遺構配置図

●山本駅

大宝律令(8世紀初頭に制定された日本史上初めて律と令がそろって成立した本格的な律令)が成立すると、東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海の7つの官道が整備され主要街道には駅を設置、駅馬・伝馬を置くことを定めている。

山本駅は、元明天皇が都を平城京に遷した翌年の和銅4年(711)に、古代山陰道と近江へ通じる交通の要所として設置された畿内の「駅」の一つである。『続日本記』には「山背国綴喜郡山本駅」と記され、平城京と太宰府を結ぶ山陽道の宿所として、また淀を経て丹波路へとつづく山陰道の要所として設けられたことがわかる。「駅」には官吏の往来のための駅舎があって、駅長や駅馬、駅子が置かれ旅や通信の賑わいを見せていたといわれる。

●開運山・寿宝院

本尊は十一面千手千眼観音立像(重要文化財)です。平安時代後期、高さ169.1cm、櫃一木造りです。

開運山・寿宝院は高野山真言宗の寺院であり、第42代文武天皇慶雲元年(704)の創建で、昔は「山本の大寺」と称し、七堂伽藍が備わって和泉川(現在の木津川)沿いの平野にある大きな寺であった。しかし東方を流れる和泉川の度々の大洪水により建造物を流失したので、それより西方に「一佛寺」を建てた。その後、正長元年(1428)8月2日の大洪水で「佐牙・若松両社」廃壊、「一佛寺」も流出したが、永享3年(1431)石戸村の西山を開発し、現在の「佐牙神社」境内にあった法楽寺(三山木の廃寺)に観音堂を建立し一佛寺の残仏(十一面千手観音像など)を安置した。

寿宝寺は、かつてあった一佛寺の北西およそ400mの現在地に享保17年(1732)4月17日に創建され現在に至っている。

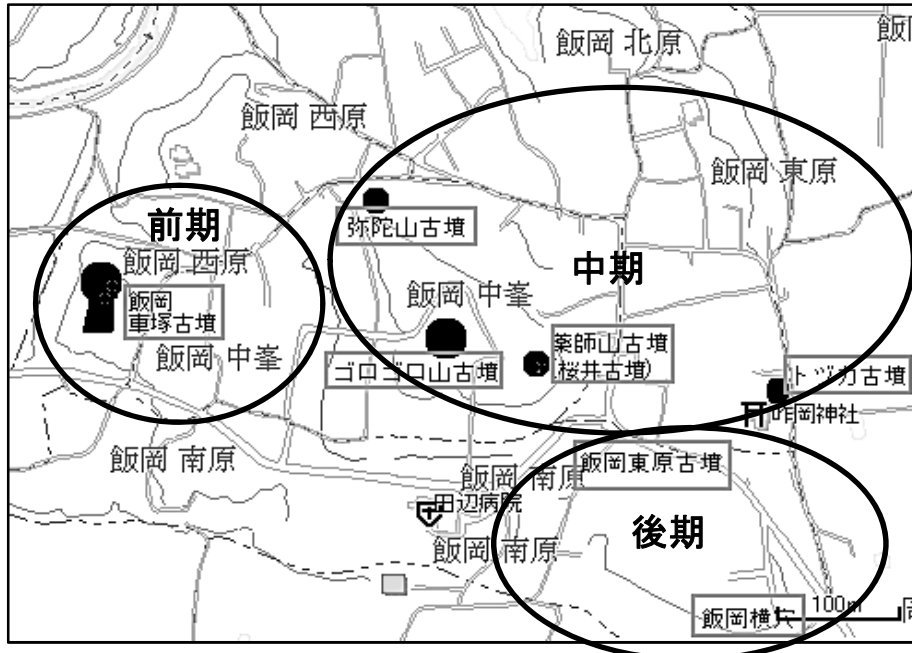
なお、観音堂に安置されていた十一面千手観音立像は、明治初年の神仏分離令により寿宝寺へ移された。安置されている収蔵庫は昭和42年(1967)に建築された。

収蔵庫には千手観音の他、降三世・金剛夜叉明王が安置されている。千手観音は長い間秘仏であったことと、素地ながら護摩供養をしていたため虫食いがなく状態が非常に良い。平成9年に修理されたその姿は口元に朱が残りこの朱だけは平安時代のままだという。収蔵庫を開けたときと閉めた時とでは表情が全く異なるので、拝観の際には表情の違いを確かめてほしい。檀像風のその顔は穏やかながら、明るい時は口元の朱が目立ち目元は力強い。一方、扉を閉め暗くすると目を閉じ口元の朱が消え、何とも言いようのない優しく神秘的な姿を見せる。

千手観音は通常42本の手を持って千手と呼ぶ場合が多いが、実際に千本の手を持つ千手観音様もいらっしゃる。大阪の「葛井寺」、奈良の「唐招提寺」とともに、実際に千本の手を持つ千手観音として有名なのがこの寿宝寺の観音さまです。体内には、伝教大師42歳の御作にして、厄除けの所願成就のために造られたものであるといえます。

伝教大師42歳とは大同3年(808)になり、平安時代初期になりますがいかがでしょうか。

●飯岡(いのおか)古墳群



飯岡古墳群は、飯岡丘陵に、前期の車塚古墳をはじめ、中期の薬師山古墳、ゴロゴロ山古墳、弥陀山古墳、トヅカ古墳、後期の飯岡東原古墳、飯岡横穴と古墳時代を通じて多くの古墳が造られた。木津川の水運に関係する一族の墓と考えられる。伝承では継体天皇に関する古墳といい石碑も建っている。

「飯岡(いのおか)」と書いて、「くいおか」と読むらしい。トヅカ古墳の前に咋岡神社があり、古くは「くいおか」と言われていたようである。

●飯岡(いのおか)横穴

飯岡丘陵の南東斜面に位置し、かつては2基あったという。花崗岩の地山をくりぬいて作られている点に特徴がある。昭和53年(1978)の発掘調査で、古墳内部の床面から古墳時代後期の須恵器(すえき)がみつかったが、平安時代に再利用されたこと、室町時代に内部が荒らされていたことなどがわかった。そのため、作られた当時の状態は不明である。松井・薪などの横穴群とともに南山城の古墳時代後期の実態を考えるうえで貴重な一例である。

玄室は4.1m×2.3m×1.5m、羨道幅1mです。

●式内社 咋岡神社

社頭に掲げる案内(京田辺市教育委員会)には、「宇賀乃御魂(ウガノミタマ)神と菅原道真をまつり、天神あるいは天神宮と呼ばれていたが、明治8年(1875)、式内社・咋岡神社として認定された。

木津川の氾濫により、江戸中期の元禄8年(1695)に現在地に移され、その際に菅原道真が新に祭神に加えられ整備されたことが、文書と石燈籠銘文から判明する。

元の位置は、飯岡の北端(北約1km)で木津川と普賢寺川の合流点の箇所であったと口伝されている」とあるが、当社の創建由緒・年代についての記述はない。

境内正面に横長の拝殿(割拝殿・間口五間・奥行二間・瓦葺き)、その奥に本殿(一間社流造・方一間・銅板葺)が東面して鎮座する。

この神社は88才になると升と升切り棒を奉納する習慣有り。米寿の「米」と社名・咋岡の「咋・クヒ」とが食物を指すことからかもしれない。

万葉歌碑が鳥居右にある。

「春草を馬咋山(うまくひやま)ゆ越え来(く)なる雁が使は宿(やどり)過ぐなり」

(9卷 1708) 柿本人麻呂

(訳) 春草を馬が食う 馬咋山を通して 越えて来るらしい

雁の使いは 何の便りも無く 旅の宿りを過ぎていくことだ

境内の巨木・スタジイは、平成3年(1991)に「京都の自然200選」に指定されている。

●トヅカ古墳

円墳 直径25m、高さ3.5m、古墳時代中期、墳頂部には、竪穴式石室に使われていた石材が散乱、明治7年発掘の際、銅鏡3面、刀剣、馬具、管玉などが出土している。(現在京都国立博物館に保管)なお、墳上には、「神魂丘旧蹟」の石標がたつ。古墳の現況は竹藪になっている。

○出土遺物の銅鏡

①神人歌舞画像鏡

銘帯<文字>「尚方作竟自有紀 辟去不羊宜古市 上有東王父西王母 令君陽 = 多孫子兮」</文字>、完形19.9cm、1874年出土、京博蔵、
同範鏡:熊本県船山、福岡県京都郡



②神人車馬画像鏡

銘帯「公□氏作鏡四夷 多賀國家人民息 胡虜殄滅天下復 風雨時節五穀孰」
1874年出土、京博蔵、
同範鏡:福岡県番塚、大阪府郡川、長持山、岡山県朱千駄、福井県西塚)、

③変形一神四獣鏡 銘文なし、完形16.2cm、1874年出土、京博蔵



○その他出土遺物 勾玉・管玉・小玉・刀・劍・轡・杏葉・鏡板の鉄製武器・鹿角製刀装具・馬具・玉類・埴輪です。

●薬師山古墳

円墳 直径38m、高さ6m 墳頂部に江戸時代の石仏を安置した薬師堂があり、「桜井王古墳」(椀子王の子)の石標がある。葺石が墳丘に施されていたとみられています。

●ゴロゴロ山古墳

古墳の別名を、茶臼塚、釈迦山古墳とも呼ばれている。飯岡丘陵のほぼ中央、頂上近くに位置する古墳時代中期のもので、南山城地方を代表する、大きな円墳(現在、前方後円墳とする説もある)である。すでに盗掘にあって、遺物は何も残っていない。伝承では、継体天皇の妃である倭媛(やまとひめ)、この人は福井の三尾君堅槓(みおのきみかたひ)の娘で、この人との間に生まれた椀子(まるこ)皇子の塚というのが確証はない。継体天皇の筒城宮に近いところから伝説になったものと思われる。

古墳の直径は60m、高さは9m。墳丘頂部は直径20mの平坦地になっている。葺石の存在もあり、北東部には濠がめぐっていた跡がある。

●穴山梅雪の墓

戦国時代の武将。甲斐国武田氏の家臣で、御一門衆のひとり。幼名は勝千代。母南松院殿は武田信虎の娘で武田信玄の姉にあたる。妻は信玄の娘である見性院。壮年期に出家し梅雪斎不白と号した。武田左衛門とも称する。後代には武田二十四将の一人に含まれており、南松院所蔵本では信玄の傍らに配置されている。

天正10年(1582)2月25日、織田信長の甲斐侵攻に際しては甲斐南部の河内領・江尻領の安堵・武田宗家の継承を条件に織田方に内通し、徳川家康を通じて信長に内応した。

同年5月には信長への御礼言上のため家康に随行して上洛し、近江国安土(滋賀県近江八幡市安土町)において信長に謁見する。堺(大阪府堺市)を遊覧していた際の6月2日には京において信長が横死する本能寺の変が起こったため、家康と別行動で急ぎ甲斐に戻ろうとしたが、『三河物語』によると、金品を多く持っていた穴山信君(梅雪)一行は、家康従者に強奪されることを恐れて別行動をとった結果、山城国綴喜郡の現在の木津川河畔(現在の京都府京田辺市の山城大橋近く)で落ち武者狩りの土民に襲撃されて殺害されたとされる。

フロイスは『日本史』で次のように書いている。「穴山殿は遅れ、また少数の部下しかいなかったため、不幸にして一度ならず襲撃され、まず部下と荷物を失い、最後には殺された」享年42歳位。

●飯岡車塚古墳

前方後円墳 長さ81m、後円部の直径60m、前方部の幅は45m、高さ4.5m、竪穴式石室で明治35年(1902)発掘の際に石釧、車輪石、鍬形石、勾玉、管玉など、多くの玉石製品が出土した。古墳の表面は葺石でおおわれ、周りは埴輪で囲まれている。埴輪のなかには楕円筒埴輪があることが、昭和51年(1976)の発掘調査でわかった。石室の大きさから4世紀後半とされる。現在は前方部は茶畑となり、後円部には「上殖葉王古墳(かみえばのみこ)」と記した石標が立つ。

上殖葉王(かみえばのみこ)とは、第28代天皇宣化天皇(継体天皇の第2子)と皇后の橘仲皇女(たちばなのなかつひめみこ)との子に上殖葉皇子(かみえばのみこ)は恵波王またの名は椀子(まるこ)と『日本書紀』に記述されている。

継体天皇の子の椀子(まろこ)皇子と混同している。



飯岡車塚古墳の後円部頂上の「上殖葉王古墳」の石柱

●参考文献

- ・『京田辺大百科』歴史・風物篇 2006年 京田辺大百科編集委員会編・発行
- ・『けいはんな風土記』平成2年 門脇禎二監修 (財)関西文化学術研究都市推進機構編・発行
- ・『筒城宮遷都1500年記念シンポジウム資料集』2011年 京田辺市教育委員会編・発行
- ・『萬葉集に詠まれた南山代の古代景観』乾幸次 2002年 (株)古今書院
- ・『古墳・埋蔵文化財』昭和47年 (財)京都府文化財保護基金編・発行
- ・『京田辺の史跡探訪 歴史散歩コース』小泉芳孝 2012年 竹取翁博物館
- ・『飯岡遺跡第4次発掘調査概報』平成5年 田辺町教育委員会編・発行
- ・『田辺町史』村田太平他編 昭和43年 田辺町役場
- ・『南山城の古寺』山崎しげ子 平成22年 (株)飛鳥園
- ・『日本書紀』上下 宇治谷孟 昭和63年 (株)講談社
- ・『日本書紀』上下 坂本太郎他 1984年 (株)岩波書店
- ・『古事記』下 次田真幸 1995年 (株)講談社
- ・京田辺市観光ガイドマップ 京田辺市・
- ・同志社大学 京田辺CANPUS
- ・同志社京大田辺キャンパス内の遺跡と歴史関連施設
- ・同志社大学歴史資料館パンフ
- ・南山城古寺探訪パンフ